Japanese Society of Cultural Anthropology

片岡樹・シンジルト・山田仁史共編『アジアの人類学』

東京，春風社，2013年
x＋339頁，2,381円（＋税）

山口　裕子*

本書は、2009年から相次いで刊行された「来たるべき人類学シリーズ」全５巻の第４巻である。本シリーズが目指すのは「従来の人類学のトピックを、人間探求という観点から大胆にくみかえ」ることだという（本書そでより）。その中で、セックス（第１巻）、経済（第２巻）、宗教（第３巻）、人と動物（第５巻）に続く本書のテーマはなぜアジアで、それは何を目指すのか。共編者による序「アジアを疑いつつアジアを理解するために」が提起するのは、「アジア」が自分たちを規定する言葉でありながら、同時に外部（西洋）から与えられた性格規定であることに起因する諸問題――アジアとはエキゾチックな他者なのか、自分たちのことなのか、そもそもアジアとは何なのか――である。だが編者らいわく本書にその答えはない。それは読者が見つけるしかなく、本書が示すのはその材料なのだという（p. iv）。

以下では、各章の内容を振り返り「材料」を拾い集めながら、編者らが潔くも早々に白旗をあげた課題、つまりアジアという枠組みを疑いつつアジアを理解することへの本書の貢献という点から批評を加えてみたい。

本書は３部10章からなる。第Ⅰ部は「アジアの人類学ことはじめ」である。第１章「アジアをみる眼」（山田仁史）は、国内外のアジア研究を豊富に参照して生態環境、生業、言語と形質上の特徴と分布を簡明に解説する。狩猟、採集、牧畜、農耕に加えて、海漂民や陸上の漂泊民の生業を紹介し、狩猟採集人口の変遷や、言語形質にみる環太平洋における東部アジアの位置づけを示すことで、アジアの歴史的、空間的な奥行きと社会的多様性を読者に再認識させる。次にアジアを対象とする近世以降の日本の人類学的研究の系譜を辿る。明治から大戦期の人類学における日本起源論の興隆と、日本が自らをその外部に定位しながらアジアを他者化した経緯とが軌を一つにしていたことを跡付ける。この「日本のオリエント」としてのアジア観は乗り越えられたのか、という問題提起で章は閉じられる。

第２章は「フィールドワークと民族誌」（片岡樹）である。タイ山地のキリスト教社会でのフィールドワークの経験を主軸に、事前に準備した問いが調査地では通用しなかったこと、そこから筆者自身が西洋的キリスト教観を自明視していたことに気付く過程などが描かれる。一見、人類学の初心者に向けたフィールドワーク入門だが、自身が依拠する西洋的前提への気付きの告白、「ぶっつけ本番」（p.45）で「地べたをはいずりまわる視点」（p.53）によるフィールドワーク論は、短時間で仮説検証的な調査に走りがちな、評者を含む近年の民族誌家の実践に対する「骨太フィールドワーカー宣言」にも読める。

第Ⅱ部「暮らしの中の文化」は、牧畜、焼畑、狩猟採集、衣食住などの多様な暮らしを取り上げる。第３章「牧畜にみるアジア：生業・思考・国家」（シンジルト）は、内陸アジアの牧畜民タタルが対象である。タタルは、周囲のヨーロッパ人やアジアの農耕文明にとって自己同定に必要な否定すべき「野蛮な他者」であった。だが牧畜民は対他的にのみに規定される単なる枠組みなどではなく、実存レベルでの独自性があるという。この「牧畜のエートス」というべき独自性は西対東といった二項対立を相対化しうるものであり、その自然と人間の共存を善とする観念に対しては、近年では自然保護の観点からも外部から肯定的評価が寄せられている。

第４章「アジアの焼畑」（増野高司）は、タイ北部の焼畑とそれを取り巻く社会環境の変容を考察している。国際社会では、焼畑の「焼く」行為が注目され森林破壊の主因とみなされてきた。だが著者いわく焼畑の特徴は土地の休閑にあり、その機能は地力の維持回復にも増して植生遷移による雑草の抑制にある。近年では政府の換金作物栽培奨励や土地政策、国際的な森林保護の機運の中で焼畑民の生存基盤が脅かされているとして、増野は人間と自然を峻別しないアジアの自然観を斟酌した自然保護のあり方を提言する。

第５章は「狩猟採集・漁撈」（小野智香子）である。北－北東アジアの狩猟採集・漁撈の複合的な実践を

* 一橋大学大学院社会学研究科・特別研究員
E-mail：h.kurosakiyamaguchi@gmail.com

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

取り上げ、それに密接に関わる海獣や魚類については、年齢や形状に応じて細分化された豊富な語彙が存在することなどを紹介している。

第6章「衣食住：インドの事例から」（松川恭子）は、インドの多様な衣・食・住を、環境的要因と文化的要因に注目して紹介する。たとえば食では、気候風土の違いと伝統医学におけるエネルギーバランス、浄／不浄の考えとカースト制度などの諸要素の組み合わせによって多様性が生まれる。こうしてインドでは自然、神、他の人間とを切り結ぶ関係が、日常的な衣食住の関係の中で具体化される。

第Ⅲ部「変わりゆくアジア」は、アジアのモノ、人、イメージの移動と流通、展開が主題である。第7章「モノから見たアジア文化」（角南聡一郎）は、墓標、狛犬、そして招き猫やお札などの招福・僻邪造形などのモノに着目し、それらの来歴やアジア各地での形態や解釈の共通性と差異について豊富な事例を紹介している。

第8章は「アジアをつなぐ親族・ネットワーク」（新井和広）である。南アラビアのハドラマウト地方は産業や農地に乏しく、余剰人口を継続的に排出することで社会を維持してきた。19世紀以降、東南アジアで増加した、ハドラマウト出身の移民（ハドラミー）は、婚姻を通してホスト社会と同化し宗教的尊敬を浴しながら親族関係を軸にネットワークを広げた。新井は従来ハドラミーにとって移民とは国家間ではなく、世界各地の親族や同郷者の間に形成された広範なコミュニティ内の移動であると指摘して、「越境」「ディアスポラ」を近代的な領域国家成立以降の現象であると歴史化する。

第9章「観光がつなぐアジア」（高山陽子）は近年の中国で興隆する共産党ゆかりの地を巡る「革命観光（紅色旅游）」と、そこで販売される、かつてのプロパガンダ・ポスターなどを加工、商品化したトランプなどの土産物に注目し、社会主義へのノスタルジーと、近代産業化が同時進行する現状を紹介している。

第10章は「アジアの外部のアジア：ヨーロッパにおけるチベット仏教のひろがり」（久保田滋子）である。かつてチベットはヨーロッパ人にとって「キリスト教の及ばない野蛮な地」だったが、大衆小説の映画化などによって「理想郷シャングリラ」のイメージが劇的に広まる。のちにこれがダライラマ亡命によって難民化した約8万人のチベット僧が欧米各地で受け入れられる素地となった。久保田は2007年のハンブルグでの仏教の祭典「ザ・ダライラマ」を子細に観察した後で、繰り返し発信される、平和、非暴力、人権、環境、心身の健康、伝統保持のメッセージが、西洋が追求してやまない価値にほかならないことを看取している。

以上各論考を評者なりに要約した。各章の議論の粗密には偏りがあるように思え、章題と本文、序章の要約との対応が読みとりにくい部分もあった（第9章）。他方で、本書が生態環境、生業、宗教などの点で多様な地域や民族社会とともに、アジアの外部に拡大、流通するアジア的要素の事例も広く扱うことでアジアを多面的に捉えようとする点、随所に現在のアジアの胎動を知る手掛かりを提示している点は評価したい。たとえば各章を通読して気付くのは、一方ではグローバル化に反して、あるいはグローバル化すればこそプレゼンスを増す近代国家の存在である。国境を越えた人の移動は、今日では送り出し受け入れ双方の国家の移民政策や送金システムの影響を受けずにいられない。現にインド洋沿岸部でのハドラミーの移動は、近代領域国家の成立とともに終息した（第8章）。各国政府の政策は、「もの」を従来の歴史的な文脈から切り離し、新たな意味を創出する（第9章）。また多くの事例は国家の近代化や経済自由化による生活の変化を伝えていた（第3、4、5、6章など）。他方でいくつかの事例は、国家を介さずに環境保護、伝統、人権といったグローバルな指針とローカルな実践が結びつく、またはその萌芽的状況を捉えていた（第3、4章）。

だが序章で掲げられた「アジアを疑いつつアジアを理解する」という課題への貢献という点では物足りなさを覚える。実のところ評者は本書を手にした時に一種の緊張感を覚えた。評者の予測では、本書の主眼はアジアなる枠組みの再考、つまり「アジアを疑う」ことにあり、「日本のオリエント」としてのアジア観の克服（第1章）といった問題意識を中核に議論が展開されるものと半ば勝手に身構え、勝手に期待したのだ。

蓋を開けてみると、たしかにいくつかの論考はアジアとそうではないものとの間の、時に緊張をはらんだ接触域における、アジア的枠組みの可変性や拡大の契機について論じていた（たとえば第3、10

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

章)。だが少なからぬ論考は、「アジアを疑う」プロセスは軽々と飛び越えて、アジアの一部としての対象社会の様態を、いささか拍子抜けする率直さで描いていた。この「アジアを疑う」ことへの身構えの差は何に起因するのだろうか。

考えてみれば、評者が緊張感と呼ぶこの感覚は、日本が「日本のオリエント」としてアジアをまなざし植民地化した経緯や、同時期のアカデミズムで進行した、東洋史とは別個に日本「国史」の分野を成立させた過程、そして山田が指摘するように日本民族学の成立と初期の実践もこれと軌を一つにしていたという事実（第１章)、そこにヨーロッパが自己と他者を弁別してオリエントを生み出し世界を認識していった経緯を重ね合わせる時に覚える、後ろめたさと自省をはらんだ緊張である。この感覚は評者もそうだが、かつて日本が植民地化した東アジアや東南アジアの諸地域を研究対象とする場合に特に身につまされる類のものかもしれない。そうであるならば、本書の対象地域やテーマの広範さを鑑みれば、アジアという枠組みを歴史的に問う時に覚えるこの緊張感に程度の差があるのは無理からぬこととともいえる。この事実がアジアの、とりわけ日本との関係性をめぐる歴史的経験の多様性を再認識させてくれるのだ。

だがそれゆえにこそ翻って欲をいえば、この途方もなく広範で多様な範域が、ある局面では「アジア」なる名で呼ばれ捉えられているという事実について、おそらく「アジアの人類学」の主題をおいては集結しえなかったであろう多彩な著者らの間で横断的かつ対話的な議論がなかったことは惜しまれる。「アジアを疑う」ことが、日本の植民地化を経験した諸地域でとりわけ緊張を喚起する問いならば、そうではない諸地域において、アジアなる枠組みが今日いかなる意味をもち、いかなる疑い方がありえるのか、著者たちに尋ねてみたいところである。今日のアジア諸国、諸地域の経済成長や国際社会でのプレゼンスは、植民地化の歴史や、オリエンタリズム的二項対立を過去のものに見せかけるのに十分なほどに増強している。だがこれらの問題や対立図式は評者が思うところ、まだ解消されたわけでも、きちんと乗り越えられたわけでもないのだ。

だが上述の瑕疵は、本書を特徴づける、対象社会の人々の生についての瑞々しい記述や、あるいはさらに、失われゆく伝統的生活様式への郷愁や、西洋とは異なるアジア独自の自然観への素直な賛意の表明（第４章）を完全に台無しにするだろうか。本書のいくつかの論考に対して、他者表象をめぐる本質化や「差異の植民地化」の問題、非西洋を称揚するオクシデンタリズムを指摘することは容易に思いつく。だがその次の瞬間にはこんな疑問が浮かぶのだ。身近なモノの来歴や（第７章)、熊肉ハンバーグの美味しさ（第５章)、思いがけない地での日本の神話とよく似た神話との遭遇（第２章）など、本書は小さな発見に満ちていた。評者とて、「アジアを疑う」ことは一旦保留にして、そうした発見に小さく心を躍らせたではないか。アジアを疑わずに理解することは本当に不当で不可能なのだろうか、と。

眼前の対象を、それ自体見慣れた感のある既存の問題枠組みにはめこむことに対して繰り返し逡巡と違和感を覚える評者自身の姿を少し突き放して見た時に、気付いたことがある。かつてリサールの小説の混血の主人公イバルラは、ヨーロッパ滞在から帰還したマニラで通りかかった植物園に、ヨーロッパの植物園の光景を図らずも重ねてしまう［リサール 1986：47]。リサールにならい、この「望遠鏡をさかさまに覗いたように」眼前のものを当り前のものとして体験することができなくなるような、二重写しのヴィジョンを否応なしに生み出すものをアンダーソンは「比較の亡霊」と呼んだ［アンダーソン 2005：３-４]。比較の亡霊に取り憑かれたイバルラに自身を重ねるアンダーソンに、評者はさらに自らを重ねていたのだ。

人類学を実践していると、この比較の亡霊にしばしば出くわす。「アジアという枠組みを疑う」という課題もまた、忘却のかなたから繰り返し甦る亡霊に似ている。これに取り憑かれて、眼前で起きていることやその記述の面白みへの感受性を鈍らせたくはない。だがそれは、決して解決済みではない課題でもある。比較の亡霊は手強い。それを克服するには、とことん比較をし続けるよりほかに、今のところ評者には方法が思い浮かばない。本書を契機に、著者たちと読者を巻き込んで、一元的ではないはずのアジアの疑い方と理解に向けた議論がさらに展開していくことを期待する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Cultural Anthropology

参照文献

アンダーソン、ベネディクト
2005『比較の亡霊：ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介ほか訳、作品社。

リサール、ホセ
1986『ノリ・メ・タンヘレ：わが祖国に捧げる』岩崎玄訳、井村文化事業社、勁草書房。

中原聖乃著
『放射能難民から生活圏の再生へ――マーシャルからフクシマへの伝言』

京都，法律文化社，2012年
171頁＋xxii，2,400円（＋税）

飯嶋　秀治*

本書は、アメリカによる核実験に曝されたマーシャル諸島共和国をフィールドにして、現地の「ふつうの生活者」(p.xxi) の放射能被害とのつきあい方を、フクシマ原発被害後の世界に向けて描いた民族誌である。以下、各章の内容を見よう(…は中略。また不明な点は評者が著者に問合せた点を了とされたい)。

「はじめに――マーシャルからフクシマへの伝言」で、著者は核兵器開発における事故と原発事故における被害は、被害者の視点からは重なる状況を踏まえ、両者を「被ばく」と記す。まさにそうした地域が、マーシャル諸島共和国の核実験被害を受けたロンゲラップ共同体である。

1914年から日本の植民地であったマーシャル諸島は、1947年からアメリカによる国連信託統治領となる。1954年アメリカによるビキニ環礁の水爆実験が行われ、東に180km離れたロンゲラップ共同体のメンバー86人が直接被害に遭い、実験後に移住した子孫とともに「放射能避難民」となった。1986年にはマーシャル共和国として独立をするも、アメリカと自由連合協定を締結し、アメリカからの核実験損害基金などの補償金で国家財政を回してきた。現在ロンゲラップ共同体の約2,000人が被害共同体となっているが、この構成員の多くはロンゲラップ諸島から数百km離れたメジャト島、基地のイバイ島、首都マジュロ、アメリカなどに暮らす。2004年からは新自由連合協定下で核実験損害基金は打ち切られるも、今も国家予算の6割がアメリカからもたらされている。

そうした中でリーダー層（村長、国会議員、村会議員、土地管理者）ではなく、ふつうの生活者を対象に、第一は「アメリカの核実験によって受けたロンゲラップ共同体のその後の著しい混乱を、アメリカの問題として描き」(pp.xv-xvi)、第二は「共同体が、それでも生活圏を再生しようと…補償金要求とは異なる、別の論理でコミュニティを再建する」(p.xvi) 力を描くのが本書の目的である。

「第一章　安全保障の不平等性」では放射能被害を追う。1954年3月朝、広島の原爆の一千倍の水爆ブラボーがビキニ環礁に投下。「七色に光る異様な空を眺め…しばらくすると爆音…すさまじい爆風」(p.2)。「夕刻になると子供たちを中心にして下痢、吐き気、頭痛といった苦痛を訴え…翌日になると、食欲不振、眩暈、嘔吐、下痢を起こした」(p.3)。だが被ばく者への治療はなかった一方「検査は徹底して行われた。軍事基地に収容された直後に、アメリカ原子力委員会と国防省の合同医療チームがアメリカ本土から派遣され、被ばく者から血液と尿の採取」(p.7)。3ヶ月後人びとは無人島に移された。

実験から3年後、この原子力委員会は一部表土を入れ替え、実質上の安全宣言を出し帰島を促す。こうして1957年251名が帰島したが、残留放射能による内部被ばくで、体調不良は10年近く続いた。こうして1960年被ばく者と子孫で信託統治領政府高等裁判所に提訴。領外への司法権はなく却下されるも1966年アメリカから見舞金が支払われ、人びとは経済的には豊かになった。こうした背景にはアメリカの国家安全保障の歴史があった。第二次世界大戦後、核実験場にビキニ環礁が決まると、1946年居住者は他の環礁に強制移住され「さながら核実験ショー」(p.18) のように行われた。こうしてミクロネシアを軍事利用可能な国連信託統治領とし、1954年に投下された水爆がブラボーであった。1980年マーシャルはアメリカと自由連合協定の仮調印を行ったが、これは「引き続き軍事的に利用するが、

* 九州大学大学院人間環境学研究院
E-mail：shuuji@lit.kyushu-u.ac.jp

NII-Electronic Library Service